慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「基礎づけの基礎づけ」問題の構造
Sub Title	The structure of the problem of meta-ground
Author	北村, 直彰(Kitamura, Naoaki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2021
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.146 (2021. 3) ,p.111- 125
JaLC DOI	
Abstract	One of the most thorny issues in the metaphysics of grounding is the problem of meta-ground—the problem concerning what, if anything, grounds the facts about what grounds what. This paper aims to clarify precisely how this problem arises by identifying crucial assumptions and their roles in the formulation of the problem. Specifically, I examine two different formulations proposed in the literature—Theodore Sider's and Louis deRosset's—and reveal their mutual relationship. The overall discussion makes explicit the core idea that lays the foundation for the formulation of the problem in a way that is neutral between competing theoretical frameworks for the notion of metaphysical fundamentality.
Notes	特集：岡田光弘教授 退職記念号 原著研究論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000146-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「基礎づけの基礎づけ」問題の構造

北　村　直　彰*

The Structure of the Problem of Meta-Ground

Naoaki Kitamura

One of the most thorny issues in the metaphysics of grounding is the problem of meta-ground—the problem concerning what, if anything, grounds the facts about what grounds what. This paper aims to clarify precisely how this problem arises by identifying crucial assumptions and their roles in the formulation of the problem. Specifically, I examine two different formulations proposed in the literature—Theodore Sider's and Louis deRosset's—and reveal their mutual relationship. The overall discussion makes explicit the core idea that lays the foundation for the formulation of the problem in a way that is neutral between competing theoretical frameworks for the notion of metaphysical fundamentality.

1.　はじめに

世界の構造に関する直観的な見方の一つは，〈さまざまな種類の事実のあいだに階層的な関係がある〉というものである．たとえば，人間の信念や知覚に関する心理学的事実は脳状態をはじめとする生物学的事実に依存しており，それらの生物学的事実は生体組織を構成する水やタンパク質などについての化学的事実によって支えられ，さらに，それらの化学的事実は最終的には素粒子についての物理学的事実に基づいている．ここで，

* 島根大学法文学部

「支えられる」,「基づく」といった語句によって表されている関係は，上層に位置する種類の事実が下層に位置する種類の事実によって決定される——たとえば，どんな生物学的事実が成り立つかが決まれば，どんな心理学的事実が成り立つかも決まる——ということを含意するものである．そして，あらゆる事実を決定する最下層の事実を構成するのは，この世界を形づくる基本的な要素となる存在者である．たとえば電子やクォークはそうした構成要素の一つであり，水や人体や痛みはそれらに依存する派生的な存在者である，と考えられる．実際にどのような種類の事実がどのような階層を成しているか，また，この世界の基本的な構成要素はどのような存在者か，といったことはもちろん大きな問題であるが，実在が全体としてある種の階層構造を備えているという考えそのものは，さまざまな探究の分野において共有されているだろう．

本稿がとりあげるのは，世界の構造についてのこのような直観的な描像を「基礎づけ (grounding)」という概念によって特徴づけようとするプログラムである（以下ではそれを「基礎づけのプログラム」と呼ぶ）．このプログラムは，上下の階層とされるものを同一性の関係によって結びつけて単一の種類の事実へと還元することを目指さない穏健なものでありながらも，スーパーヴィーニエンスのような単なる必然化／様相的相関関係には尽きない真に説明的な関係によって階層構造を特徴づけようとする野心的なものであり，伝統的な形而上学的探究の明確化に寄与するものとして近年注目を集めている[1]．その一方で，このプログラムに対しては根本的な問題——「基礎的なもの／派生的なもの」という区別そのものを不可能にするかもしれない問題——が指摘されている．その問題はこれまでいくつかの仕方で定式化されてきたが，異なる定式化の仕方どうしの相互関係については十分に検討されていない．そこで本稿では，主要な二つの定式化を比較しながら再構成し，それを通じて，問題の本質的な構造を明確にすることを目指す．

以下ではまず，基礎づけのプログラムの依拠する「形而上学的説明」がどのようなタイプの説明として考えられているかを概観し，基礎づけのプログラムの重要性をメタ形而上学的な観点から確認するとともに，本稿の議論に必要な範囲で基礎づけ関係の一般的性格を特徴づける（第二節）．次に，基礎づけのプログラムを脅かす根本的問題を素描したうえで（第三節），ルイス・デロセットによる定式化とセオドア・サイダーによる定式化を再構成し，両者の相互関係と問題の本質的構造を明らかにする（第四節）．

2.　実在の階層構造と形而上学的基礎づけ

基礎づけのプログラムは，形而上学的な説明関係に依拠して実在の階層構造を特徴づけようとするプログラムである．「私が痛みを感じているのは，私の脳が特定の状態にあるからだ」というように，心的状態を物的状態によって説明する文，あるいは，「この机が存在するのは，素粒子が机状に並んでいるからだ」というように，複合的な対象の存在を単純な対象の存在と配列によって説明する文が正しいとしよう．これらの説明において説明項は，実在の特定のあり方に関して問われる「なぜ……なのか」，「何によって……なのか」といった問いに対して，非因果的な依存関係を捉える仕方で答えをあたえている．上記の二つの説明が実際に正しいものであるかに関してはもちろん議論の余地があるが，同じタイプの説明は，さまざまな哲学的論争において現れるものである．規範的・価値的性質を自然的性質によって説明する場合や，傾向性をカテゴリカルな性質によって説明する場合，文の真理値をその文が表す世界のあり方によって説明する場合など，同種の説明の例は枚挙にいとまがない．被説明項となる対象の存在・性質の形而上学的な基盤を明らかにしようとするこの種の説明は，因果的説明をはじめとする他のタイプの説明と区別して「形而上学的説明」と呼ばれている．

ある形而上学的説明が真であることは，その説明項と被説明項のあいだに必然化／様相的相関関係が成り立つことを含意する．たとえば，マクロレベルの事実をミクロレベルの事実によって説明した場合，その説明が正しいならば，ミクロレベルの事実が同じ可能世界ではマクロレベルの事実も同じであることになる．しかし，形而上学的説明の最大の特徴は，単なる様相的な概念では捉えられない真に説明的な関係を捉える点にある．例えば，ソクラテスを要素とする単元集合と，その要素であるソクラテスは，「必然的に，一方が存在するならば他方も存在する」という意味で相互に必然化し合う関係にあるが，両者の存在のあいだの説明的関係は一方の方向にのみ成り立つ――「ソクラテスが存在するのは，ソクラテスの単元集合が存在するからだ」という説明ではなく，「ソクラテスの単元集合が存在するのは，ソクラテスが存在するからだ」という説明だけが正しい――はずである（少なくとも，そうした趣旨の主張はもっともらしい）[2]．このように形而上学的説明は，ある事実がまさに「なぜ」成り立つのかに関連する情報を含んでおり，その点で，単なる様相的な概念よりもきめ細かな仕方で事実どうしの形而上学的関係を捉えることを可能にする．以下では，形而上学的説明がそうした特徴をもつ固有のタイプの説明であることを前提し，「基礎づける／られる」という関係を，（正しい形而上学的説明の実例における）「形而上学的に（少なくとも部分的に）説明する／される」という関係に対応するものとして考える．

基礎づけのプログラムの重要性は，非還元的かつ真に説明的な関係を用いて実在の階層構造を特徴づけることによって可能なかぎり直観的な描像を維持できるということに加えて，以下のようなメタ形而上学的な利点が得られることにも存する．第一に，基礎づけのプログラムにより形而上学全体の任務が明確化される．形而上学を「世界の究極的な本性の探究」として捉えるのはアリストテレス以来の伝統であるが，基礎づけのプログラムは，この素朴なアイデアに「すべての事実を説明する（基礎づける）究

極的事実の探究」というかたちで実質をあたえる．つまり，世界のあらゆることがらを説明できる基礎的な事実を特定する試みとして形而上学の探究を理解できるようになるのである．基礎づけのプログラムを具体化・精緻化することは，アリストテレス以来の伝統的な形而上学を現代に蘇らせることでもあると言えるだろう．

第二に，基礎づけのプログラムはさまざまな形而上学的立場の特徴づけに役立つ．たとえば，物理主義は「すべての事実は物理的なものであるか，物理的な事実によって説明することができる（基礎づけられている）」というテーゼとして理解することができる．また，普遍者についての唯名論は「普遍者は存在するが，その存在は個別者に関する事実によって説明することができる（基礎づけられている）」という主張として捉えることができる．このように，基礎づけのプログラムによって，個々の形而上学的論争を「基礎づけ」という観点から統一的に理解する見通しが得られるのである．

基礎づけのプログラムを脅かす根本的問題に立ち入る前に，基礎づけ関係の特性に関する標準的な仮定を整理するとともに，議論の便宜上いくつかの用語と表記法を導入しておく．任意の平叙文「ϕ」と「ψ」について，形而上学的説明「ϕ なので ψ (ψ because ϕ)」が正しいとき，ϕ という事実と ψ という事実のあいだに基礎づけ関係が成り立つ．すなわち，ϕ という事実が ψ という事実を基礎づけている．以下では，ϕ という事実を「$[\phi]$」と表し，ϕ という事実が ψ という事実を基礎づけていることを「$[\phi] \twoheadrightarrow [\psi]$」と書く．

基礎づけ関係の論理的性格に関しては，非反射性・推移性・整礎性を仮定する．すなわち，基礎づけ関係は厳密な半順序であり，かつ，基礎づけ関係の無限下降列は存在しないものとする．これらの仮定は，基礎づけ関係が説明的な関係であること，および，〈いかなる事実も，それ以上説明をあたえることのできないような何らかの究極的な事実によって説明され

る〉という考えに基づくものである[3].

それ以上説明をあたえることのできない究極的な事実（「$\neg\exists x(x \twoheadrightarrow y)$」をみたす y）を基礎的 (fundamental) な事実と呼び，何らかの事実によって基礎づけられた事実を派生的な事実と呼ぶ．なお，事実以外のカテゴリーに属する存在者（実体や性質など）は一般に「対象」と呼ぶことにする．

3. 問題の素描

基礎づけのプログラムを脅かす根本的問題は，「基礎づけの基礎づけ」問題と呼びうるものであり，次のようなジレンマのかたちで表すことができる．

「$[\phi]\twoheadrightarrow[\psi]$」という形式の文で表される事実を「基礎づけの事実 (grounding fact)」と呼ぼう．基礎づけのプログラムにしたがえば，さまざまな基礎づけの事実が成り立つこと，すなわち，諸々の種類の事実どうしのあいだにさまざまな仕方で基礎づけ関係が成立することによって，それらの事実とそこに登場する存在者が階層構造を形づくっている．では，基礎づけの事実そのものは何らかの事実によって基礎づけられているのだろうか．基礎づけの事実そのものを基礎づける事実がどのようなものであるかを述べるのは難しいように見える．また，仮に基礎づけの事実そのものもまた基礎づけられているのだとすると，$[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi]]$ はある事実 $[\chi]$ によって基礎づけられ，$[[\chi]\twoheadrightarrow[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi]]]$ はある事実 $[\chi']$ によって基礎づけられ，$[[\chi']\twoheadrightarrow[[\chi]\twoheadrightarrow[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi]]]]$ はある事実 $[\chi'']$ によって基礎づけられ，$[[\chi'']\twoheadrightarrow[[\chi']\twoheadrightarrow[[\chi]\twoheadrightarrow[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi]]]]]$ は……というように，際限なく複雑さを増していく無限に多くの基礎づけの事実が被説明項として存在することになり，かつ，形而上学的身分——特に，基礎的であるか否かに関する身分——が定かではない無限に多くの事実（すなわち，$[\chi], [\chi'], [\chi''], \ldots$）が説明項として存在することになる．こうした事実群はどちらも，世界の階層構造のうちのどこに位置づけられるものなのかが明らかではない点で，本

稿の冒頭で述べたような直観的な描像へと組み込むことが困難であり，それゆえその存在を認めがたいように見える．しかしその一方で，仮に基礎づけの事実そのものは基礎づけられていないのだとすると，基礎づけ関係によって実在の階層構造を捉えるというプログラムそのものが頓挫してしまうように見える．たとえば，心的状態 M についての事実 f が物的状態 P についての事実 g に基礎づけられているとすると，M は P に依存した派生的な存在者であることになるはずだが，$[g \twoheadrightarrow f]$ を基礎づける事実が存在しないならば，それ以上説明をもたない究極的な事実の一つに M が登場していることになり，それゆえ，M は基礎的な存在者であると考えなければならないことになる．同様のことが，任意の基礎づけの事実について言える．したがって結局のところ，あらゆる存在者が基礎的であることになる．つまり，基礎づけの事実の成立によって階層構造を形づくると思われたさまざまな存在者は，基礎づけの事実そのものの基礎性を想定することで単一の階層へといわば押し込まれてしまうため，この想定のもとでは存在者の階層が崩壊することになるのである[4].

このように，基礎づけの事実もまた基礎づけられていると考えても，基礎づけの事実そのものは基礎づけられていないと考えても，基礎づけのプログラムは大きな困難に直面する．これが，基礎づけのプログラムを脅かす根本的問題の大枠である．

4.　二つの定式化の関係

deRosset (2013, §2) は，次の二つの前提を認めると存在者の階層構造が崩壊する，というかたちで「基礎づけの基礎づけ」問題を定式化する[5].

(FUND)　基礎づけの事実はいずれも基礎的である．

(CORR)　任意の存在者 e について，e についての何らかの事実が基礎的であるならば，e は基礎的な存在者である．

注意しなければならないのは，(CORR) において任意の存在者に対して適用しうる仕方で「基礎的」という形容が登場していることである．本稿のこれまでの論述では「基礎的／派生的な存在者」という表現を直観的な仕方で用いてきたが，この表現の正確な理解に関しては検討が必要である．第二節で述べたように，基礎づけ関係は事実どうしのあいだの関係として導入されており，それゆえ基礎性と派生性はあくまでも事実がもちうる特性として定義されていたからである．

任意の存在者に対して適用される「基礎的／派生的」の区別を理解し，(CORR) を正当化するための一つの方法は，事実に対して適用される「基礎的／派生的」と任意の存在者に対して適用される「基礎的／派生的」との連関に関する何らかのテーゼを想定し，(CORR) をその帰結とみなす，というものである．そして，そうした方法のうちで最も単純なのは，次のような定義を導入することである．

(Def$_1$) x は基礎的な存在者である $\overset{\text{def}}{\Longleftrightarrow}$ x についての何らかの事実が基礎的である（すなわち，x についての事実群のなかに，いかなる事実によっても基礎づけられていないものが少なくとも一つ存在する）．

(Def$_2$) x は派生的な存在者である $\overset{\text{def}}{\Longleftrightarrow}$ x は基礎的な存在者ではない（すなわち，x についてのあらゆる事実がそれぞれ何らかの事実によって基礎づけられている）．

この定義にしたがえば，たとえば，ある粒子が特定の電荷をもつことがいかなる事実によっても説明できないなら，その粒子は基礎的な存在者である．また，机についてのあらゆる事実が机を構成する素粒子についての事実によって説明できるなら，机は派生的な存在者である．つまり，基礎づけ関係のもとで構造化された事実の階層の「基盤」となる部分に含まれている存在者――言い換えれば，基礎づけ関係によって順序づけられた事

実の順序集合における極小元――が基礎的な存在者であり，そうした「基盤」に上に成り立つ階層に含まれている存在者が派生的な存在者だと考えるのである．このような考えは，本稿の冒頭で述べたような実在の階層構造に関する直観的な見方からの自然な帰結とみなすことができるだろう．

あるいは，次のようにして基礎づけの関係項を存在者一般に拡張する方法もある．

(Def$_0$)　存在者 $x_1, x_2, \ldots$ が存在者 y を基礎づけている $\overset{\text{def}}{\Longleftrightarrow}$ y についてのあらゆる事実が $x_1, x_2, \ldots$ についての事実によって基礎づけられている．

つまり，ある存在者が別の存在者によって基礎づけられているとは，前者についてのどのような事実も後者を引き合いに出すことによって説明できるということだと考えるのである．事実どうしのあいだに限定された基礎づけ関係の場合と同様に，いかなるものによっても基礎づけられていない存在者を「基礎的」な存在者と呼ぶならば，(Def$_1$) の双条件文は (Def$_0$) から帰結する[6]．

(Def$_1$) は (CORR) を含意する．したがって，(Def$_1$) ないし (Def$_0$) が自然な定義として認められるならば，(CORR) も認められることになる．だが，これらの定義を認めないとしても (CORR) は十分に正当化されうる．すなわち，たとえ存在者一般の「基礎性」や存在者一般のあいだの「基礎づけ」を原始概念として導入したとしても (CORR) は受けいれられる．(Def$_1$) と (Def$_0$) の双条件文はそれぞれ，存在者一般の基礎性と事実の基礎性との連関，存在者一般のあいだの基礎づけ関係と事実どうしの基礎づけ関係との連関を述べたものとしてもっともらしいからである．(Def$_1$) と (Def$_0$) それぞれの背後にある上記の考えが自然なものであるかぎりで，二つの双条件文は十分に動機づけられている．つまり，(Def$_1$) と (Def$_0$) は定義としてで

はなく，概念間の連関についての単なる双条件文としても理解できるのであり，(CORR) の正当化にとってはそれで十分である．厳密に言えば，二つの双条件文の “only if” 方向のいずれかさえ認められればよい．(Def_0) の双条件文の “only if” 方向は (Def_1) の双条件文の “only if” 方向を含意し，後者は (CORR) そのものにほかならないからである．実際，(Def_1) の双条件文全体が十分に動機づけられているのだから，結局のところ，条件文 (CORR) はそれ自体としてもっともらしいとも言えることになる．つまり，(CORR) を正当化するためには (Def_1) の背後にある考えのうち双条件文の “only if” 方向に対応する部分だけを認めれば十分であり，その考えの全体を認めて (Def_1) の双条件文の正しさを想定したり (Def_1) を定義として導入したりすること，および，(Def_0) の背後にある考え（の一部）を認めて (Def_0)（の “only if” 方向）を定義ないし単なる連関を述べたテーゼとして想定することは，「基礎づけの基礎づけ」問題の構成という観点からは付加的なオプションであることになる[7].

(CORR) と仮定 (FUND) から，存在者の階層の崩壊が次のようにして帰結する．(FUND) より，任意の基礎づけの事実 $[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi(a)]]$ が基礎的である（a は「ψ」に現れる表現が指示する任意の存在者とする）．この基礎づけの事実は a についての事実であるから，この事実の基礎性と (CORR) より，a は基礎的な存在者である．つまり，派生的な事実に登場するあらゆる存在者が基礎的であることになり，存在者の階層構造が崩壊してしまう[8].

同じことは，(FUND) および (CORR) と，

(NFO)　派生的な対象が存在する．

という前提が不整合をきたす，というかたちでも述べることができる．派生的な対象を d とし，この対象についての任意の事実を $[\psi(d)]$ とすると，(CORR)（を d で例化したものの対偶）より，$[\psi(d)]$ は派生的な事実であ

る．すなわち，ある事実 $[\phi]$ が存在し，$[[\phi]\twoheadrightarrow[\psi(d)]]$ が成り立つ．(FUND) よりこの事実は基礎的である．この事実は d についてのものであるから，(CORR) より d は基礎的な対象である．これは d が派生的な対象であることと矛盾する[9]．

この問題の解決策としてデロセットは (FUND) を否定する方途を探求するが，実際に擁護されるのは，(FUND) の否定よりも強いテーゼ

(NO-FUND)　基礎づけの事実はいずれも派生的である．

である．このことは，「基礎づけの事実のうち少なくとも一つは基礎的である」という (FUND) よりも弱いテーゼ（すなわち (NO-FUND) の否定）と (CORR) から帰結する部分的な「崩壊」だけでも受けいれがたい，という考えを反映している．つまり，上の定式化においては (FUND) に依拠し，存在者の階層全体が崩壊する様を描写することによって問題を強く印象づけているが，実際にはそれよりも弱い前提を用いて本質的に同じ問題を構成できる，ということである．

デロセットによる定式化は，「基礎づけの基礎づけ」問題を初めて指摘した Sider (2011, §7.2, §8.2.1) の議論を下敷きにしている．サイダーは，

(Purity)　基礎的な事実を表す文は，基礎的な概念を表す言語表現だけを含む．

(NFN)　基礎的でない概念を表す言語表現が存在する．

を前提したうえで，それらから

(NO-FUND-C)　任意の基礎的な事実 f と任意の派生的な事実 g について，$f \twoheadrightarrow g$ ならば，$[f \twoheadrightarrow g]$ は派生的である．

を導く．(Purity) は

(Purity*) 任意の言語表現 E について，E を含む何らかの文が基礎的な事実を表すならば，E は基礎的な概念を表す．

を含意する．これはデロセットの (CORR) に対応するテーゼである．また，(NFN) は (NFO) に対応するテーゼであり，(NO-FUND-C) は (NO-FUND) を「結びつけ」の事実 (connecting facts)，すなわち基礎的な事実と派生的な事実を結びつける基礎づけの事実に限定したものである．

(Purity) を動機づけているのは，(CORR) の背後にあるのと同様のアイデアを少しだけ拡張したものである．すなわち，基礎的な概念とは世界の基礎的なあり方の記述に登場する概念のことであり，世界の基礎的なあり方はまさにそうした概念だけを用いて記述できるのだ，というアイデアである．もっとも，上記の対応関係からわかるように，問題の構成において実質的な役割を担うのは (Purity) そのものではなく，それが含意する (Purity*) である．(Purity) は，サイダーの枠組みにおける「基礎性」概念に対する構成的な制約を表すテーゼとして導入される．

(Purity) にこうした特権的な身分があたえられることの結果として，サイダーとデロセットのあいだでは問題を捉える際の力点の置き方に相違が生まれている．上で述べたように，デロセットの場合には，(CORR)・(NFO)・(FUND) のあいだの不整合として問題が捉えられたうえで，(NO-FUND) がその解決策として擁護される．それに対してサイダーの場合には，(NO-FUND-C) は前提 (Purity) から帰結する認めざるをえないテーゼとして現れる．そして，このテーゼを認めることによって生じる理論的困難が強調される．すなわち，〈(NO-FUND-C) と基礎づけ関係の推移性・整礎性より，結びつけの事実はいずれも基礎的な事実によって説明されなければならないことになるが，その役割を果たす基礎的事実を特定するのは難

しい〉という困難である[10].

(NO-FUND-C) は (NO-FUND) より限定的なテーゼであるが，このことは，サイダーの議論が全体として，事実どうしの説明的関係一般ではく，とりわけ基礎的事実と派生的事実のあいだの説明的関係に焦点をあてていることを反映している．デロセットの議論と対応させる仕方で述べるならば，基礎的でない概念を表す言語表現 E とそれを含む真なる文「$\psi(E)$」の存在から，「$[\phi] \twoheadrightarrow [\psi(E)]$」という形式の文で表される事実の存在を (Purity*)（を E で例化したものの対偶）によって導く際に，「ϕ」の位置を占める文を基礎的事実を表す文へと（基礎づけ関係の推移性と整礎性を前提することによって）制限している，ということである．

サイダーの (Purity*)・(NFN) とデロセットの (CORR)・(NFO) との関係が一致ではなくあくまでも対応であるのは，事実に加えて何が「基礎性」を担うのかに関して両者のあいだに相違があるからである[11]．すなわち，前者においては「ある言語表現が基礎的な／基礎的でない概念を表すこと」が考えられているのに対して，後者においては言語表現ではなくそれに対応する実在の側の基礎性が考えられている．「基礎的な概念を表す」言語表現は，サイダーの用語では「構造的 (structural)」な言語表現であり，サイダーはこれを原始概念として採用している．ただし注意すべきなのは，「基礎性」の担い手が言語表現であるとしても，それによって主題化されるのは言語表現がそれ自体としてもつ特徴ではなく，あくまでも言語表現が表す実在の側の特徴だということである．構造的な言語表現とは，世界をその節目で切り取る (“carve at the joints”) 表現，すなわち，実在の特徴にぴったりと対応する――実在の「構造」を正確に反映した――表現だからである[12]．実際，上で述べたように，(Purity*)（を含意する (Purity)）を動機づけているアイデアは，「基礎性」の担い手として実在を直接的に主題化する (CORR) の場合と基本的に同じであり，それによって両者のあいだの対応が保持されていると言える．

5. おわりに

以上の議論から，次のように結論できる．デロセットとサイダーそれぞれの定式化のあいだには，鍵となるテーゼの理論的な位置づけや「基礎性」概念の特徴づけなどの点に関して重要な相違があるものの，そうした相違は，構成される問題そのものの構造に本質的な影響を及ぼすものではない．いずれの定式化においても，問題の根本的な前提をなすのは，〈基礎づけ関係のもとで構造化された事実の階層の「基盤」となる部分に含まれている存在者こそが基礎的な存在者だ〉という直観的な発想である．そしてその発想は，本稿の冒頭で述べたような実在の階層構造に関する直観的な見方からの自然な帰結とみなすことができる．そのかぎりで，「基礎づけの基礎づけ」問題は，基礎づけのプログラムを支えている世界全体の捉え方を主題的に検討することを促していると言える．

注

[1] そうした近年の研究動向の嚆矢となったのは Schaffer (2009) である．

[2] この具体例は，Fine (1994) が用いて以来，様相的概念のきめの粗さを指摘する際にしばしば用いられるものである．

[3] 本稿の冒頭で述べたような実在の階層構造に関する直観的な見方は，基礎づけ関係の論理的性格に関するこれらの仮定を受けいれたときに，基礎づけ関係によって自然に特徴づけられるように見える．しかし，こうした仮定を受けいれないとしても基礎づけ関係によって実在の階層構造を適切に特徴づけられるか否かに関しては，議論の余地がある．この点に関しては Rabin (2018) を参照.

[4] 「崩壊 (collapse)」という表現は deRosset (2013) によるものである．

[5] 本節でなされるデロセットの定式化の再構成は，中心的な論旨に関わらない点に関してデロセット自身の表現・叙述に忠実でない部分も含んでいる．サイダーによる定式化の再構成についても同様.

[6] 証明：x が基礎的な存在者であるとすると，x はいかなるものによっても基礎づけられていない．よって (Def_0) より，どのような存在者を引き合いに出しても x についてのすべての事実を説明し尽くすことはできない．したがって，x についての事実のなかに，いかなる事実によっても基礎づけられていないものが少なくとも一つ存在する（さもなくば，x についての事実は十分なだけの存在者を引き合いに出せばすべて説明し尽くせることになり，前文で述べたこと

と矛盾する）．逆も同様．

[7] デロセットは，(CORR) を含意するものとして (Def_0) の双条件文の “only if” 方向（デロセットの表現では (LINK)）に言及したうえで (deRosset (2013), p. 4)，(CORR) がそれ自体としてもっともらしいことを説明している (deRosset (2013), pp. 10–11)．もっとも，デロセットは実際のところ (Def_0) を定義として導入したいと考えているようである．deRosset (2013) の注 14 を参照．

[8] deRosset (2013), p. 7.

[9] deRosset (2013), pp. 7–8.

[10] なお Sider (2011) は，(NO-FUND-C) を認めることによって生じる理論的困難を提示するにとどまり，それに対する解決策は論じていない．

[11] さらに言えば，Sider (2011) の枠組みにおいては基礎づけ関係ではなく「形而上学的意味論」という（非原始的な）概念が採用される．この点は，基礎的な事実と派生的な事実との説明的なつながりをどのように特徴づけるべきかを検討する際に重要になるが，「基礎づけの基礎づけ」問題そのものには関わらないため，本稿ではこの点に立ち入らない．

[12] Sider (2011) は，構造的な言語表現の例として，論理的語彙や基礎物理学で用いられる述語などを挙げている．

参 考 文 献

deRosset, L. (2013), “Grounding Explanations,” *Philosophers’ Imprint*, 13 (7): 1–26.

Fine, K. (1994), “Essence and Modality,” *Philosophical Perspectives* 8 (1): 1–16.

Rabin, G. O. (2018), “Grounding Orthodoxy and the Layered Conception,” in: R. Bliss and G. Priest (eds.), *Reality and its Structure: Essays in Fundamentality*, Oxford: Oxford University Press, pp. 37–49.

Schaffer (2009), “On What Grounds What,” in: D. Chalmers, D. Manley, and R. Wasserman. (eds.), *Metametaphysics*, Oxford: Oxford University Press, pp. 357–383.

Sider, T. (2011), *Writing the Book of the World*, Oxford: Oxford University Press.